

Nara Women's University

シンポジウムの感想と今後の課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: <関西の社会運動を考えるシンポジウム>実行委員会 公開日: 2011-04-01 キーワード (Ja): 課題, 介護, 人権 キーワード (En): 作成者: 上野, 久美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2652

シンポジウムの感想と今後の課題

上野久美

1 はじめに

古都、奈良の町で今回のシンポジウム「社会運動で語ること／伝えること／繋がること」が開催されたことは、とても画期的だと思いました。

奈良には部落地域が多くあり、また、障害者問題、在日問題等、多くの問題が混在した地域でもあります。古き町はこの様な問題に関しては、どちらかといえば、封建的な考えがあります。その封建的な町で、部落、障害者、在日、そして性的少数派のことを深く知ってもらうという今回のシンポジウムは意義深いものがあったと思います。

2 土肥いつき様の講演について

土肥さんの生い立ち、現状の生き方等多く語ってくださいました。私自身障害者でありながら性的少数派の人権については、勉強不足なことも多くありましたので大変勉強になりました。土肥さんはご自分が何なのか？解らず生きてこられ、ある日「トランスジェンダー」という言葉と出会って、ご自分が何者か解り、とてもすっきりしたというお話がありました。これは障害者問題にとっても共通するところがあります。私も経験したことです。幼年期の頃、周りの人たちと自分が違う？特に同年代の人たちとの違い？に気付き、とても複雑な思いをした経験があります。私以外の周りの子どもたちは自分で着替えたり、トイレも出来るようになったり、走り回ったり、また、学校へ行くようになったりしました。しかし、私は歩くこともなく、まして走ることもなく、家の座椅子に座っている日々でした。そして、学校には行けず（就学猶予）家で親が勉強を教えていました。当時、障害者という意味が幼年期の私には全く理解できていませんでした。10歳の時、母親が過労で倒れ、それをきっかけに施設に入所しました。そこで、初めて自分と同じ歩くことも走ることも出来ない、車椅子の人達と沢山出会いました。それと同時に、自分だけじゃなく、私の様な人が沢山居ることに安心した記憶があります。子供心に自分が何者か解らない不安さは、自分から他人へ伝える方法も解りませんでした。しかし、同じ人が居るということで、孤独からの解放がありました。土肥さんのおっしゃる、自分だけじゃない孤独から解放された気持ちと同じかと思います。

土肥さんはトランスジェンダーと解るまでは、心の中に自分が何者であるかという複雑な心境を閉じこめていたというお話がありました。そのことが対して苦痛なことではなかったということに少し驚きました。ある意味自分らしく生きられず、社会の仕組みに合わせ、生活されていたということになります。それが苦痛でなかったという理由の中には、とても周りの人達に恵まれていたというのが大きな要因だというお話が印象に残りました。

自分の心の奥底にあるものは閉ざしていても、友達、家族、職場との関係を作り上げてこられた努力があったのだと思います。

現在は、トランスジェンダーということを公表し、更に自分らしく生きておられます。しかし、性的少数派の方がカミングアウトし、生きるというのは少数派ですが、今の生き方を選択された理由の心の奥底をもう少しお聞きしたかったと思いました。

3 上野久美の講演について

私自身、脊髄性筋萎縮症という難病で、車椅子生活を送っています。いわゆる重度障害者です。世間から見ると「大変な障害ですねー」と知らない人からよく言われます。しかし、私の選択した生き方は、この障害があるのが私自身であるということです。かわいそうであるとか、特別大変であるという思いは私自身感じません。このような生き方については、土肥さんとも共通する点が多くありましたので、それを意識しお話をさせていただきました。

特に関西特有の、「ものすごいこと」なのに笑いで終わられる内容などを話させていただきました。

障害者運動で何か行動を起こす時等ですが、駅でビラ配りをする際でも関西人は単にビラを配るだけでなく、仮装したり、替え歌をしたり等何か目立つアプローチを加えたりします。その辺関東は真面目に一生懸命ビラを配っているような気がします。

また、先日私自身が経験したことですが、ある商店街を車椅子でブラブラしていたら、全く知らないおばあさんに「前世で悪いことをしたからそないなったんじゃ！」と大声で私に叫びました。それを見ていた周りの人が、私を見るというより叫んでいたおばあさんに視線が集まっていました。今時そんなことを言うのはどこの誰！という感じでした。私は言われたことに落ち込まず、変な目で見られていたのは、おばあさんあなたなのよ、と気分良くその場を去りました。この発想も関西特有なのでしょうか？

もうひとつ、何故か車椅子で外を出歩いていると、知り合いでもない人にすれ違う際「にこっ」とされるが多々あります。私もこの様な性格なので、つい「にこっ」と笑顔を返してしまいます。ある時、「にこっ」として通り過ぎたはずのおばさんがもう一度私のところへ戻ってきて「あんたあめちゃんあげるわ」と言われ、ありがたくあめちゃんを頂きました。これは典型的な関西のおばちゃんの暖かい心配りだと感じました。

この様なひとつひとつの出来事を真剣に考えていたら「やってられんわ」というのが私の本心です。ある意味障害を乗り越え生きていくということの本質でもあるように思います。

今回 30 分という短い時間でしたので、私の生い立ちを含め運動のありようを十分説明できなかつたことが残念に思っています。

4 岸さんの講演について

岸さんの講演の中身は私にとって障害論の新しい発見となりました。それは、先天性の場合、生まれた時から「障害」というものを持ってしまいます。そこには、「持つ」と「持たない」という選択はないというお話がとても印象的でした。健常者に生まれ、人生をどう選ぶかという選択とは違い、障害者の場合、生まれて、死ぬまでの期間を障害とともにどう人生を歩むかという、ここに大きな障害者と、健常者との違いがあるという岸さんのお話にはとても納得のいく内容でした。障害とは、本人の努力や熱意等では治すことはできないものである、その為ハンディを担っていくのが社会である。そこに必要なのは、ひとりひとりの正しい人権という学びであるという論理には、これまでに無い心のスッキリさを感じさせられました。

私自身、人権というものにおいて、いろんな角度で考えてきましたが、とても的を得たお話だったと思いました。

今回、岸さんのお話は30分という短い時間でしたが、もっともっと深くお聞きしてみたいと思わせる内容でした。

5 課題とまとめ

今後、間違いなく高齢化者社会になっていきます。そして、介護を必要とする人は更に増えていくことでしょう。性的少数派の人たちも高齢者になり、やがて介護が必要になっていきます。その時、男性として介護を受けるのか？、女性として介護を受けるのか？、例えば、性同一性障害の方の場合なら、心の方の性別で介護を受けるのか？、身体の方の性別で介護を受けるのか？というような複雑な問題が出てきます。

障害者の介護問題の歴史は、施設などでは、施設側の利便性を重視した介護体制で、異性介護が普通になっています。それに対して、障害者は人権差別だとし、大きな反発もあります。訪問介護事業所などに、「同性介護」を求める声は多いです。また、近頃では「同性介護を提供します」というのをうたい文句にしている事業所も多くできています。この様に、障害者の介護は、同性介護を求めてきた歴史が強くあります。しかし、性的少数派の方にとっては、同性介護となると、それもまた人権問題が発生してきます。この問題を人権問題と考えた場合、新しい発想の人権問題の考えが必要だと思いました。その様な時、ある障害当事者団体から、全国の障害当事者団体向けに、「男／女で分けることの危険性」ということを問題提起されました。その内容は性的少数派の意思に尊重した介護者の選択でした。同性介護を求めてきた障害者運動に、もう一つ視点を増やしてほしいというものです。「異性愛者」だけでなく、「同性愛者」「両性愛者」もいます。それは、性的意識の向く方向が、異性か同性か両性かに向くということです。それは、本人の意思では変更も選択もできないと言われていています（もっと言えば、「性的無指向」といって、他者に性的意識が向かない人もいます）。けれども、私たちの社会は「異性愛」が当たり前と思いきり、それ以外の人を差別、排除しているのが現実なのです（敬称略）。異性介助によって傷つけられてきた歴史も分かっていますが、こういうこともあるということも考えてほし

いです。同性介助がいいとか、異性介助がいいとか、そういうことを言っているわけではありません」・・・といったものでした。

私は、この様な視点で障害者運動していくことはとても重要だと思いましたし、障害者団体からこの様な提起はをされたことは、今後の新しい発想の障害者運動につながるものだと思います。

必ず訪れる介護問題に、私たち障害者も含め、性的少数派の方たちの人権を考えた介護を受けられるような社会になってほしいです。それが大きな課題と思いました。

6 終わりに

今回予想を超えるほど大勢の方が集まれたのに驚きました。それと同時に、マイノリティへの関心があることを感じました。

また、関西を意識した人権のシンポジウムという、何とも言えないユニークな発想にも人を集めたように思いました。

今回のようなシンポジウムが、更なる人権問題の考えを深められり一歩となることを願っています。